

日本クーベルタン委員会通信

第5号 2026年6月23日

編集・発行

日本ピエール・ド・クーベルタン委員会(CJPC)

事務局：〒438-0043 静岡県磐田市大原 1572 番地 1

静岡産業大学スポーツ科学部スポーツ科学科 和所泰史 気付

電話：0538-36-8839

E-mail：y-washo@ssu.ac.jp

巻頭言

サッカーW杯が開幕しました。今大会には史上最多となる48チームが参加し、カナダ・メキシコ・米国の3か国による共同開催という点でも、これまでにない規模の大会となります。スポーツイベントの規模は、そこでつながる国・地域の人々の広がりという意味するといえるでしょう。

一方で、今大会は、国際法違反の疑いが指摘される軍事行動の主体である米国が開催国のひとつであるという点で、平和の礎を創出するとされてきたスポーツの価値にも問いを投げかけています。サッカー界は、スポーツにおける反差別の理念を牽引してきました。それにも関わらず、今大会では、米国と軍事的緊張関係にあるイランの選手団関係者をめぐり、入国ビザの発給や入国条件に制約が生じています。6月10日に開催されたIOC理事会後の記者ブリーフィングでは、IOCとLA2028組織委員会との協議を通じて、「LA2028では課題の多くを克服できる」との見通しが示されたと報じられています。しかし、開催地のひとつが軍事行動の主体であるという事実に向き合わないまま、何ごともないかのように大会を開催するだけでは、問題の本質には迫れないでしょう。

スポーツをめぐるこうした世界情勢の中で、日本クーベルタン委員会通信（以下、通信と記す）第5号をお届けすることになりました。2026年総会にご出席いただけなかった会員のみなさまには、2025年度の事業一覧が記録されていますので、お目通しください。

総会と同日に開催された研究会では、中塚義実副会長に国内ユースフォーラムの歴史をたどる貴重なご報告をいただきました。報告後には、国際ユースフォーラム（以下、国際または国内 YF と記す）への参加者が当時の経験や、その経験がその後の人生に与えた影響を語る座談会も開催されました。CJPCの中核的事業のひとつである教育活動の歩みを振り返るとともに、その未来を展望する機会となりました。この研究会の記録は、今号の重要なコンテンツのひとつです。

パリ2024大会の回想は、今号で最終回となります。通信第2号以来、望月敏夫さん、結城和香子さん、松瀬学さん、稲垣康介さん、建石真公子さんの5名の会員が寄稿してくださった連載です。大会の挑戦と舞台裏、クーベルタンの思想と人生、そしてフランス社会を中心に紡がれてきた女性たちの闘いとオリンピック。この通信でなければ読むことのできない多面的な連載の締めくくりとして、今号では「AI監視カメラ」に着目した脇田泰子さんの寄稿を掲載します。先端的科学技術の利用は、常に功罪両面の影響を社会にもたらします。オリンピックが、そのような技術と社会の関係を可視化する場であり続けてきたことを、改めて考えさせられる寄稿です。また、大会回想のバトンは、ミラノ・コルティナ2026冬季大会に引き継がれ、今号では2本の寄稿をお寄せいただきました。

5月8日、東京がLA2028に向けたオリンピックQシリーズ、旧オリンピック予選シリーズの開催地に決定しました。Qシリーズは、音楽、ファッション、アートなどの文化的要素と一体となって展開される予選イベントであり、アーバンスポーツを中心に、出場するアスリートたちが本大会への出場権をめざして競います。パリ2024大会から導入された、本大会前のフェスティバル的な性格ももつ予選イベントは、LA2028に向けて、東京(5/4-5/7)、上海(5/11-5/14)、モントリオール(6/1-6/4)、オーランド(6/8-6/11)の4都市で開催されます。

若者を惹きつけようとするIOCの戦略は、オリンピック・ムーブメントに何をもたらすのでしょうか。また、東京での開催は、この国におけるオリンピック理解にどのような変化を促すのでしょうか。競技、文化、都市、メディア、そして教育が交差する場として、オリンピックをどのように捉え直すことができるのか。平和の礎としてのスポーツの価値を問い直しながら、Qシリーズを含む今後のオリンピック・ムーブメントの展開に、引き続き関心を寄せていきたいと思います。

(CJPC 副委員長・来田享子)

目次

- ・ 2026年 日本ピエール・ド・クーベルタン委員会総会資料より (和所泰史) P. 3
- ・ 研究会報告「国内・国際ユースフォーラムのこれまでとこれから」(中塚義実) P. 5
- ・ 回想・パリ2024(最終回)パリ五輪から始まるAI監視社会 (脇田泰子) P. 9
- ・ 寄稿:「ミラノ・コルティナ冬季オリンピック大会2026」
 - ① 70年ぶりに聖火がともった街で感じたこと
 - ～「超広域開催」のミラノ・コルティナ冬季五輪 (稲垣康介) P. 12
 - ② パラリンピック視察報告 (宮崎明世) P. 14
- ・ 連載「クーベルタン学校」の素顔にふれる
 - (2)ピエシュチャニ・クーベルタン学校(スロバキア) (田原淳子) P. 18
- ・ 会費の納入について ・入会のご案内 ・お知らせ P. 20

2026 年日本ピエール・ド・クーベルタン委員会総会資料より

和所泰史(同 事務局)

① 2026 年総会(2月 28 日)報告

・2025 年事業報告について

(1) 諸会議の開催

- 1) 総会 2025 年 2 月 9 日 オンライン
- 2) 暫定運営委員会 第 1 回 2025 年 2 月 9 日 オンライン
運営委員会 第 1 回 2025 年 3 月 24 日 オンライン
第 2 回 2025 年 6 月 6 日 オンライン
第 3 回 2025 年 7 月 17 日 オンライン
第 4 回 2025 年 9 月 3 日 オンライン
第 5 回 2025 年 10 月 21 日 オンライン
第 6 回 2025 年 12 月 16 日 オンライン

(2) 運営委員会の役員の分掌

委員長:田原淳子

副委員長:中塚義実、來田享子

事務局長:和所泰史

会計:木村華織

研究交流担当:建石真公子、來田享子、和田浩一

教育・ユースフォーラム担当:青柳秀幸、嶋崎雅規、中塚義実

普及・連携担当:田原淳子、脇田泰子

事務局:木村華織、田原淳子、和所泰史

ホームページ担当:木村華織、田原淳子、中塚義実、來田享子

(3) 「日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム 2025」の開催

主催 日本ピエール・ド・クーベルタン委員会(CJPC)

共催 特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー(JOA)

後援 公益財団法人日本オリンピック委員会(JOC)

主管 筑波大学オリンピック研究教育センター(CORE)、中京大学、
特定非営利活動法人サロン 2002

協力 東海学園大学スポーツ健康科学部、一般社団法人 A-GOAL

期日 2025 年 11 月 8 日(土)、9 日(日)

対面会場 関東地区:筑波大学附属高等学校

中部地区:中京大学 豊田キャンパス

全体テーマ「エクセレンスーいまの自分を乗り越える」

＜参加者 計 22 名＞

・高校生 18 名

筑波大学附属高等学校(2 名)、自由学園高等部(4 名)、国士館高等学校(3 名)、郁文館高等学校(1 名)、椋山女学園高等学校(3 名)、名古屋大学教育学部附属高校(5 名)

・大学生 4 名

清和大学(1 名)、国際武道大学(2 名)、筑波大学大学院(1 名)

(4)通信について

「日本クーベルタン委員会通信第 2 号」(2025 年 2 月 2 日)発行

「日本クーベルタン委員会通信第 3 号」(2025 年 9 月 10 日)発行

(5) Instagram の開設について

情報発信の強化を目的として、公式 Instagram アカウントを開設し、運用を開始した

(6) 国際ピエール・ド・クーベルタン委員会 (CIPC) 創設 50 周年記念行事について

・2025 年会計報告について

大野会員と佐野会員により会計監査が実施され、適正かつ正確に処理されていると認められることが総会にて報告された

② 2026 年の予定

(1)諸会議

1) 総会 2026 年 2 月 28 日 筑波大学東京キャンパス、オンライン併用(開催済み)

2) 運営委員会 2026 年 2 月 19 日 オンライン(実施済み) 以後、数回実施(予定)

(2)「日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム 2026」

開催予定:2026 年 11 月 7 日(土)および 8 日(日)

(3)「日本クーベルタン委員会通信」

第 4 号(2026 年 1 月 26 日付)、第 5 号、第 6 号の発行(予定)

(4)研究交流

(5)デジタルネットワークを通じた広報活動

(6)その他本委員会の目的に資する事業

研究会報告「国内・国際ユースフォーラムのこれまでとこれから」

中塚義実(CJPC 副委員長・NPO サロン 2002 理事長)

2026 年度の CJPC 総会は、2019 年 8 月 4 日の設立総会以来、初めて対面で行われた。

総会后、同会場で 15:00~17:00 に標記タイトルで研究会が開かれた。2 部構成となっており、第 1 部はこれまでのあゆみを中塚が述べ、第 2 部は皆川宥子会員の進行で国際 YF 参加者による座談会が行われた。

概要を報告するとともに、次号からの「リレーコラム」の紹介もさせていただきたい。

第1部 クーベルタンユースフォーラムの取り組みー国内 YF の 10 周年を機に

国際 YF は、世界中のクーベルタンスクールから高校生が集まり、座学や討議、スポーツや芸術活動を行いながらオリンピズムを学び、互いの交流を深める事業である。1997 年より 2 年に一度、クーベルタンスクールの持ち回りで開催されている。

日本からは 2009 年の第 7 回大会に都立国際高校から 2 名の生徒が参加したのが最初である。2011 年からは筑波大学オリンピック教育プラットフォーム(CORE)や中京大学、日本オリンピック・アカデミー(JOA)、NPO 法人サロン 2002 などの団体が連携し、国内 YF の開催と生徒の選考、国際 YF の引率まで、当該校の理解と協力を得ながら進めてきた。

2019 年の CJPC 発足以降は、国内 YF を CJPC が主催する形となって現在に至る。

国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム 日本からの派遣生徒数一覧

2026.4.18.

回数	開催年	開催国	開催都市	都立国際	筑波大附	附属駒場	附属坂戸	自由学園	帝京	国士館	中京大附	志学館	名古屋大附	派遣生徒	引率教員
第1回	1997	フランス	ル・アーブル	日本から不参加											
第2回	1999	イギリス	マッチ・ウェンロック												
第3回	2001	スイス	ローザンヌ												
第4回	2003	イタリア	アレンツァーノ												
第5回	2005	オーストリア	ラートシュタット												
第6回	2007	チェコ	ターボル												
第7回	2009	ギリシア	オリンピア	女2										2	白木文子
第8回	2011	中国	北京		女2									2	中塚 義実
第9回	2013	ノルウェー	リレハンメル		男1、女1									2	中塚 義実
第10回	2015	スロバキア	ピエスチャニ		男2、女1			男1、女1	男1		女1			7	中塚 義実
第11回	2017	エストニア	タリン		女1	男1	男1、女1	男1			女1	男1		7	藤原 亮治
第12回	2019	フランス	マコン		女2		男1	男1、女1			女1			6	山田 恵子
幻回	2021	キプロス	—		女1		女1	男2、女1			女2			7	—
第13回	2022	ドイツ	ミュンヘン		女1			男1		女1	女1		女1	5	内藤 智
			派遣生徒数	2	12	1	4	9	1	1	6	1	1	38	

2013 年の第 9 回大会までは、オブザーバースクールとしての 2 名の生徒派遣であったが、2015 年の第 10 回大会から 7 名のフルメンバーでの派遣となった。これを機に、派遣生徒の選考を兼ねた高校生向けのオリンピック教育の場として「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム」が 2 泊 3 日で、2015 年 3 月に筑波大学で開催された。国内 YF のはじまりである。2016 年 3 月には中京大学でも同様の趣旨で JOA セッションとして開催され、以後、筑波大学と中京大学を会場校として国内 YF が進められてきた。

コロナ禍であらゆる活動が停止した際も、国内 YF はオンラインで開催された。派遣生徒の選考までしたものの、2021 年のキプロス開催は 2022 年に延期。さらに、ウクライナ情勢の影響もあり、同地開催が難しくなったため、代わりにオリンピック開催 50 周年のミュンヘンで、規模を縮小して開催された。その後、CJPC の体制の変更化などもあって国際 YF は開催されていない。

一方、国内 YF については、CJPC 通信で既報のとおり、毎年継続して開催されている。年末に行っていたものを昨年度からは 11 月開催に改め、初日オンライン、2 日目は対面で、高校生だけでなく大学生も受け入れ、大きな成果を上げている。

国内 YF の開催実績は右スライドのとおりである。

また、ここまでの内容は 2 月 14 日の公開サロン(NPO サロン 2002 主催の公開型研究会)で発表し、同法人のオフィシャルサイトに報告書が掲載されている。ご参照いただきたい。

クーベルタン-嘉納YF と JOA ユースセッション	
第8回 2011年 北京(中国)...筑附高から2名	担い手は、CORE/JOA/サロン2002
第9回 2013年 リレハンメル(ノルウェー)...筑附高から2名	高体連研究部など
★クーベルタン-嘉納ユースフォーラム2015	★国際YF選考会を兼ねる
2015年3月13日(金)～15日(日) 筑波大学	32名(男18、女14)
第10回 2015年 ビエスチャニ(スロバキア)...日本から7名	
第3回JOAユースセッション	
2016年3月22日(火)～24日(木) 中京大学豊田キャンパス	
★クーベルタン-嘉納ユースフォーラム2016(兼JOA第4回ユースセッションinつくば)	
2016年12月23日(金祝)～25(日) 筑波大学	31名(男14、女17)
★第4回JOAユースセッション	
2016年12月24日(土)～26日(月) 中京大学豊田キャンパス	
第11回 2017年 ウルヌルメ(エストニア)...日本から7名	
クーベルタン-嘉納ユースフォーラム2017 主催:東京都高体連研究部とNPOサロン2002	
2018年3月10日(土)PM～11日(日) 筑波大学附属高校(通い)	48名(男27、女21)
第5回JOAユースセッション	
2018年3月22日(木)～24日(土) 中京大学豊田キャンパス	

クーベルタン-嘉納YF と JOA ユースセッション	
★クーベルタン-嘉納ユースフォーラム2018	★国際YF選考会を兼ねる
主催: CORE/共催: NPOサロン2002/協力: JOA	
2018年12月23日(日)～25日(火) 筑波大学	24名(男6、女18)
★第6回JOAユースセッション	
2018年12月23日(日)～25日(火) 中京大学豊田キャンパス	
第12回 2019年 マコン(フランス)...日本から6名	
クーベルタン-嘉納ユースフォーラム2019	
主催: 東京都高体連研究部およびNPOサロン2002	
2019年12月21日(土)PM～22日(日) 筑波大学附属高校(通い)	28名(男7、女21)
第7回JOAユースセッション	
2019年12月25日(火)～27日(木) 中京大学豊田キャンパス	
そしてコロナへ、	
★クーベルタン-嘉納ユースフォーラム2020兼 第8回JOAユースセッション	
主催: CORE、中京大学	2020年12月26日(土)～27日(日) オンライン
共催: CJPC、サロン2002、JOA	32名(男11、女21)
協力: 東京都高体連研究部、中京大学スポーツミュージアム	
幻回 2021年 キプロス(当初予定) ... コロナ禍で中止	

https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2026/2026-2.pdf

第2部 これまでの国際 YF 参加者による座談会

第2部は、国際 YF 参加者による座談会である。オリンピック教育の成果を知るためにも、今後の担い手とのつながりを保つためにも、歴代参加者のネットワーク構築は重要である。しかしそれ以上に、38名の派遣生徒はいまどうしているのだろうか、元気にやっているのだろうかという親心、あるいは同窓会的な感覚で企画した。

中心となって動いてくれたのが、第9回大会(2013リレハンメル)参加者でもある皆川宥子会員である。伝手をたどって歴代参加者の連絡先を調べ、事前アンケートを実施し、当日の進行を担ってくれた。連絡先がわかった31名にEメールやLINEでアンケートを送り、2月2日～21日の期間で回収、15名から回答をいただいた。皆川氏のご尽力と、急な依頼にもかかわらず快く応じてくださった歴代参加者の皆さんに感謝したい。

総会後の研究会会場には5名、オンラインで1名が参加した。懐かしい顔が並んでいる。

<座談会登壇者：会場での対面 5 名、オンライン 1 名>

回数	開催年・都市	氏名	出身校	いま何をしているか
第 8 回	2011 北京	星野慧	筑波大附	研究所にて研究職に従事
第 9 回	2013 リバノール	皆川宥子	筑波大附	ゼネコンで建築の構造設計を担当
第 10 回	2015 ビエタ	阿部道彦	筑波大附	製薬会社で薬の副作用に関する仕事
同	同	高橋優衣	筑波大附	マーケティングに関する仕事
幻回	2021 キーロス	各務吏織	自由学園	学生（ギャップイヤー中） 昨年デンマークの体操学校に留学
同	同	田和直碧 (オンライン)	自由学園	学生（4 月から社会人） 海外ソロバックパック中

座談会は、アンケート結果を紹介しながら、次のような内容で進行した。

1) 参加者自己紹介：今昔

- ・高校時代の自己紹介
- ・いま何をしているか

2) 参加大会を振り返って

- ・大会への参加動機
- ・印象深かったこと、一番の思い出、エピソード
- ・カルチャーショック、驚き、新鮮だったこと
- ・参加大会・開催地ならではの体験
- ・大会を通して得たこと、感じたこと

3) 大会参加後とこれから

- ・大会への参加経験（または幻回の代表経験）がその後の自身に与えた影響

登壇者の発言からは、高校時代の国際 YF の経験が、その後の高校・大学での活動や進路選択等に大きな影響を与えていることが感じられた。

紙面の都合で座談会の詳細を述べることはできないが、事前アンケートに掲載された以下のコメントを共有しておきたい。続きは後述の「リレーコラム」に委ねることとする。

- ・ 今までの人生では考えられない程多くの、世界中の友達が出来た。帰って来てからはみんなとの FB のメッセージやり取りが大忙し。特に同部屋だったクロアチアの子とはかなり仲が深まった。ほぼ英語話せなかった私が、深夜まで 2 人でずっと会話していたという事が信じられません！
- ・ 戦時下にあり飛行機が止まっているのにもかかわらず電車を乗り継ぎ多大な時間を割いて国際 YF に参加していたウクライナの参加青年と対話したことは特に強く印象に残っている。どこか遠い国のことのように感じていたことが、実際にウクライナから厳しい状況の中で参加していた人たちと交流する中で、実在していると強く実感した（2022 ミュンヘン大会参加者）。
- ・ 私は現在教育学の分野に学びの軸足を置いていることから、国際 YF に参加した者として、今後オリンピック教育や、国際 YF の教育的意義についても考えていきたいと今回ご案内をいただいて強く感じました。過去数年は国際 YF が開催されていないと伺っていますが、とても意義のある時間だったので、いつか復活をして、より多くの高校生が参加できることを祈っています。

日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム

第10回 2015年 ピエスチャニ(スロバキア)...日本から7名

第11回 2017年 ウルヌルメ(エストニア)...日本から7名

第12回 2019年 マコン(フランス) ...日本から6名

CJPC(日本ピエール・ド・
クーベルタン委員会)主催

★日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム2021 ★国際YF選考会を兼ねる

2021年12月25日(土)、26日(日) オンライン 高校生26名(男4、女22)

第13回 2022年 ミュンヘン(ドイツ)...日本から5名

日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム2022

2022年12月26日(月)、27日(火) オンライン 高校生19名(男6女13) 関東13・東海6

日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム2023

2023年12月25日(月)、26日(火) オンラインと対面(筑波大附高)

高校生8名(関東7・東海1)+大学生5名=計13名(男4、女9)

日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム2024

2024年12月25日(水)、26日(木) オンラインと対面(筑波大附高 & 中京大)

高校生14名+大学生5名=計19名(男6、女13) 関東14・東海5

日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム2025

2025年11月8日(土)、9日(日) オンラインと対面(筑波大附高 & 中京大)

高校生18名+大学生・院生4名=計22名(男8女14) 関東14・東海8

日本クーベルタン委員会通信での「リレーコラム」

今回を機に、国際 YF の歴代参加者のつながりができつつある。いずれは国内 YF 参加者、そして本事業に少しでも関心を寄せてくださる方々ともつながりを築いていきたい。

このような意図から、通信において次号から、国際 YF の歴代参加者による「リレーコラム」を開始したい。

その初回は、皆川宥子氏である。ご自身が参加した第 9 回大会での経験、何度かスタッフとして参加してくださった国内 YF との関わり、そして座談会を通して感じたこと、考えたことなどをご執筆いただく予定である。

本企画を通して国際・国内 YF の歴代参加者のネットワークがより強固なものとなり、次世代のオリンピック教育の担い手がここから広がっていくことを願う。

「回想・パリ 2024」(最終回)

パリ五輪から始まる AI カメラ監視社会

脇田泰子(梶山女学園大学)

2024 年夏のパリ・オリンピック・パラリンピック(以下、パリ五輪と記す)から 2 年。オリンピック閉会式の引き継ぎ式で主会場のフランス競技場(スタッド・ド・フランス)上部から、トム・クルーズがワイヤアクションで降ってきてオリンピック旗を受け取る『ミッション:インポッシブル』さながらのあのシーンをたとえ見ていなかったとしても、世の関心はとっくに米・ロサンゼルスで 2028 年開催予定の次期夏季五輪に移っている。おりしもこの夏、北中米で開催の 2026 FIFA ワールドカップ で地元アメリカ代表のグループステージ戦など計8試合が行われるロサンゼルス(SoFi)スタジアムは、28 年五輪でも 2 会場同時開催の開会式会場の一つとなる予定。ロンドン、パリに続く夏季五輪の最多 3 回開催都市は、世界中の注目を集め続けて、その日を迎えることになるだろう。

AI 監視カメラが見張るパリと五輪関連法第 10 条

このような巨大イベントの安全確保は難題中の難題だ。犯罪、抗議活動、そしてテロ。五輪に最高水準の治安対策が求められるようになったのは、選手村で悲惨なテロ事件が発生し、11 人が犠牲になった 1972 年ミュンヘン五輪以降だが、そこに開催都市をめぐる固有の事情が加わり、21 世紀の五輪をめぐる脅威はさらに複雑に深まっている。大会を、開催都市を、これらのリスクからどのように守るかは地元にとって至上命題だが、24 年五輪に際してフランスが出した答えは、目覚ましい進化を遂げる人工知能(以下、AI と記す)だった。

AI 監視カメラとは、画像や映像の認識、解析などの新しい機能を備えた AI 搭載の高性能カメラのことで、さらに膨大なデータを処理し、学習や推論を行う AI アルゴリズムでビデオ監視すると、人や物の動きの検知などがリアルタイムで可能になる。五輪を機に、このような AI 監視カメラシステムの「試験的運用」を法制化し、そのさらなる導入を図ることで安全な社会づくりという名の治安強化を目指そうというのが、フランスの目論見だ。

AI 監視カメラが見張るパリを可能にしたオリンピック関連法(以下、五輪関連法と記す)は、議会提出から激論4か月を経て、23 年 5 月、法律として施行された。フランスでは五輪開催決定の翌 2018 年、不正監査に対する厳しい姿勢から大会組織委員会の運営や活動の透明性を規定する「オリンピック法」が成立。これに治安条項を加えるため、新たに提案された五輪関連法案計 19 条のうち、最も物議を醸したのが AI アルゴリズム搭載型監視カメラの導入を認める第 10 条だ。政府は顔認証ではなく、群衆の動きや荷物の放置など事前に政令で定めた状況のみを探知するとして逃げ切った。「五輪関連法およびその他さまざまな条項」という正式名称の地味さには、五輪後もこれを運用する可能性を慎重に見越した深慮遠謀がにじむ。



パリ・地下鉄駅構内の監視カメラ(寄稿者撮影)

さらに、あくまでアルゴリズムによる拡張型ビデオ監視の「実験」として、しかも「顔認証を行わない」枠組みで本法が成立した背景には、同じ 2024 年 5 月にやはり成立し、五輪真ただ中の同年 8 月1日に発効した「欧州(EU)AI 規制法」とも足並みを揃えなければならない事情があった。それでも、フランスでは刑事警察データベースに保存される個人の写真を犯罪捜査で事後顔認証に用いる権限を警察が持つ。よって監視カメラデータは第 10 条の制限とは別に、刑事訴訟法に基づく顔認証の対象たり得る。これが治安・移民問題対策名目での当局乱用になりかねないと反対派が主張する根拠だ。

公共空間の「監視」ではなく「保護」で期限延長、2030 年冬季五輪後まで？

大会期間中、SNCF(フランス国鉄)は「イル・ド・フランス地域圏(パリ首都圏)11 駅設置の監視カメラ映像をアルゴリズムで分析」し、RATP(パリ交通公団＝パリとその周辺の公共交通機関運営事業者)は「地下鉄と RER(イル・ド・フランス地域圏の急行鉄道網)46 駅最多 300 台の監視カメラを通して同じ技術を同一ソフトウェアにより使用」と報じられた。

五輪関連法は、大会終了後の 2024 年末までに AI ビデオ監視実験に関する評価報告書を議会に提出することを政府に義務付け、専門家委員会が 100 ページに及ぶ文書を作成した。五輪期間中の大規模テスト向けに設計されたこれらの新しいセキュリティツールは、「現場における法と秩序の力の異常な存在により、最終的には期待よりも役立つことがなかった」。法律に記されたシナリオの半分近く、例えば火災の発生、人の落下、銃器の検知について、RATP や SNCF では一度もテストが成されず、また実験も単一のソフトウェア・パッケージに限定されたことから、AI アルゴリズム全般の妥当性に関する一般的な評価も、実験継続の可否も「下すことができない」。当初、2024 年末とされていた実験の期限は、五輪閉幕半年後の 2025 年3月まで、と修正された後、システムの有効性に関する疑問が評価報告書で示されたことを受け、「その疑問解消のため実験をさらに続ける」と政府は決定した。よって、延長法案は 2027 年 3 月まで期限を 2 年延長する形で続行中だが、追い打ちをかけるように 2026 年 5 月末、上院は次期冬季五輪がフランスアルプスで開催される 2030 年の終わりまでさらに 3 年間、これを延伸する再修正を認めた。次に法案が回る下院での猛反対が予想される。

五輪と顔認証

他者による私生活の管理を何よりも嫌い、自由も安全も守りたいフランス国民は、五輪名下に公共空間が「監視」されず、危険から「保護」されるという解釈により、国家による監視や規制の拡大を限定的に認め



「この先はビデオで保護された空間です」(寄稿者撮影)

るに至った。それだけテロ防止への期待が社会に強いことの表れでもある。安全、安心と引き換えに監視が過剰になり、特に公権力がそれを握れば人権侵害も引き起こされかねない危険性を承知しつつ、フランス社会は AI 監視を静かに条件付きで常態化させ始めている。

それでも一歩たりとも譲れないのが市民のプライバシーの保護だ。個人データがより広範にやり取りされる 21 世紀には、それを取り扱う際に必須の基本的な法制度についても、国の違いをある程度越え、共通した考え方に基づいて定められるものである。その文脈で考えると、パリの 3 年前に開催された 2 度目の東京五輪で、日本社会は個人データの意味についてどこまで考えていただろうか。五輪関連法でも常に大きな懸念として指摘され、その都度確認されていた「公共空間で顔認証システムを用いない」とする大前提、そしてその危険性に関する認識や議論が、日本ではほとんどないまま、五輪関係者が会場に入る際の本人確認システムとして顔認証が採用され、そのこと自体が五輪史上初の出来事として記録されている。もっとも東京は、コロナ禍による「無観客開催」という、五輪の本質から考えるとこれまた異常とも言うべき史上初の大会を敢行したため、顔認証システムに潜む危険性や、それを規制する法整備の必要性にまで議論が及ばなかったと考えられなくもない。コロナ対応に忙殺され、そのような考察を行う発想さえ浮かばなかったと言うかもしれない。

民間の顔認証システムも多々あり、リアルタイムでの利用の危険性が、なし崩し的に公権力による監視へと移行してしまわないか、その歯止めが制度としてしっかり打ち立てられているかどうかの一点に議論は尽きる。日本には民主主義的な価値観に反する監視行為を許さないための法制度がない。フランスの五輪関連法をめぐる一連の動向と比べるまでもなく、双方の社会の反応の違いは明らかだ。

監視社会下の五輪における顔認証規制法の意義

シリコンバレーを擁する米・カリフォルニア州の大都市ロサンゼルスは、デジタル社会における新たな経済モデル、監視資本主義発祥の地とも重なる。現代五輪にとって治安維持が絶対的要件である以上、曲がりなりにもパリで導入実績が作られた AI 監視の可能性を抜きに今後の五輪を見渡す方が難しくなるのではない。AI 技術社会における規制と自由の関係性や監視のあり方は、開催都市ならずとも、社会の大きな課題であり、高度な監視制度、AI 戦略やその技術に対しては倫理意識が求められる。

誕生から 130 年、世界最大級のスポーツの祭典にまで成長した五輪を、監視社会化を促したり、社会的自由の抑圧やプライバシー侵害に大義名分を与えたりする契機としないためにも、捜査当局を含む行政機関を対象にした顔認証乱用防止のルール作りが不可欠となる。 (了)

寄稿:「ミラノ・コルティナ冬季オリンピック大会 2026」

ミラノ・コルティナ 2026 冬季五輪寄稿①

70年ぶりに聖火がともった街で感じたこと～「超広域開催」のミラノ・コルティナ冬季五輪

稲垣 康介(朝日新聞編集委員)

ミラノ・コルティナ冬季オリンピックは期間中を通じて、ほぼミラノで過ごした。

フィギュアスケートやアイスホッケーなど、ミラノの会場は観客で埋まっていたし、イタリアの山岳地に生息するイタチ科の小動物、オコジョがモチーフのマスコット、「ティナ」のぬいぐるみは入手が困難なほどの人気だった。街のシンボル、ドゥオーモ(大聖堂)の広場には、大会の国際映像を制作するホストブロードキャスターの五輪放送機構(OBS)が管理するスタジオが鎮座し、その周辺の通りは五輪の装飾が施されていた。



ミラノ・ドゥオーモ広場に“君臨”する五輪放送機構(OBS)管理スタジオ(寄稿者撮影)

でも、雪は降らなかったし、平日の地下鉄の通勤ラッシュに揺られていると、そこには日常の市民生活があった。五輪一色とはいえない「普段着」に近いミラノが感じられた。

今回の冬季五輪は、史上初めて複数都市の名を冠した「超広域開催」の祭典になった。

イタリア北部の約2万2千平方キロメートルの地域に散らばる四つの会場群が舞台だった。

国際オリンピック委員会(IOC)は、全13会場の85%までが世界選手権などで利用された「既設」で、新たに造ったのはアイスホッケーとそりの2会場だと誇った。

一方、経費を抑えようと既存施設を利用したことで、会場を分散せざるをえなくなった。

ロシアのウラジミール・プーチン大統領が約5兆円ともうわさされた巨費を投じた14年ソチ冬季五輪のように、氷上競技は全て徒歩圏の五輪公園内に集め、雪上競技も1時間もあれば足を運べた大会とは違った。

足を運んだ会場群で、冬の五輪らしさにあふれていたのは、70年ぶりに聖火がともった山岳部のコルティナダンパッツォだった。ミラノから直線距離で約250キロ。東京ー富山市の距離に匹敵する。

期間中、一度だけコルティナを訪ねた。

2月12日、そり競技のスケルトン男子のウラジスラフ・ヘラスケビッチ(ウクライナ)取材するためだった。ウクライナは4年前の2022年北京冬季五輪の直後からロシアによる侵攻を受け始めた。ヘラスケビッチは大会中からそのことへの危機感を感じていた。だから北京でゴールした直後、「ウクライナに戦争はいらない」というサインを掲げた。国際世論に訴えるための叫びだった。以来、この4年間、停戦への道筋は見えていない。私は彼を定期的に取り、戦火のアスリートの葛藤、苦悩、憤りを記事にしていた。今大会はロシアによる侵攻で亡くなった選手の顔を描いたヘルメットをかぶって競技に挑むと宣言していた。IOCは五輪憲章に抵触するとして、再三、翻意を促したが、話し合いは平行線をたどった。

コルティナには泊まれる宿がなく、私はミラノから電車で2時間半ほどかけて「水の都」ベネチアに行き、そこで前泊。12日朝一番のバスで3時間近くかけてコルティナに向かった。長距離バスの車中でヘラスケビッチが失格処分を受けたことを知り、徒労の旅となった。

ただ、コルティナが五輪ムードの熱気に包まれているのを体感できた。高級ブランドの路面店が並び目抜き通りは、10分程度で端から端まで歩ける。カフェやレストランは冬季競技の強豪国のロゴや名前の入ったダウンジャケットを着込んだ一団で、どの店も大盛況だった。



コルティナダンパッツォの中心部は五輪関係者でごった返す(寄稿者撮影)

印象深かったのが、2月8日に行われたアルペンスキー女子滑降だ。16年ぶりの金メダルに挑んだ41歳のリンゼイ・ボン(米)が宙を飛び、雪面にたたきつけられた。その瞬間のライブ映像はミラノのメディアセンターで見ている。担架に固定され、ヘリコプターで搬送される映像を見ていたら、そのバックにドロミテアルプスの荒々しい急峻な岩肌が映し出されていた。雄大な自然に抱かれ、ボンを乗せたヘリが小さくなっていった。アルプスとともにある欧州のスキーの「本場」に五輪が戻ってきたんだと感じた。

そういえば、大会前にスイス育ちのクリストフ・デュビIOC五輪統括部長は記者会見で、こんな発言をしていた。

「18年平昌では全ての会場が満杯なわけではなかったし、22年北京はコロナ下だった。ようやく満員の会場、旗、大歓声が戻ってくる。これこそ本物の雰囲気だ」

さらに「今大会の強みは冬季競技の専門知識を持つ人々のいる地域での開催という点だ。ボランティアもスキーを知っているから、トレーニングの必要がない。韓国や中国では、そうはいかなかった」とも。正直すぎるというか、東アジアでの2大会は物足りなかったというニュアンスを感じ取れた。

日本人にとって、コルティナは1956年大会のアルペンスキー男子回転で、猪谷千春さんが銀メダルを手にした記憶とともにある。当時は32カ国・地域から821人の選手が集ったとIOCの資料にあった。ちなみ

に、近代五輪の提唱者であるクーベルタン男爵のIOC会長時代に開催され、のちに第1回の冬季五輪として認定された24年シャモニー・モンブラン大会は16カ国からの258人が競う規模だった。

それが、今冬は92カ国・地域から約2900人が集うまでに巨大化した。人口6千人程度の小さな山岳リゾートであるコルティナでは肥大化した祭典は収容しきれない。ある意味、「超広域」の分散開催だからこそ実現した、コンパクトで「密」な祝祭空間といえた。

さらに教訓となる意義をもう一つ。コルティナに聖火が戻ってきたことは、五輪と戦争の歴史を顧みる機会でもあったことを記しておきたい。

44年冬季五輪の開催都市に予定されていた街には、第2次世界大戦で中止に追い込まれた歴史もある。

21世紀の今、「力こそ正義」を振りかざす大国の横暴で、戦後の国際秩序は大きく揺らいでいる。

ミラノ・コルティナ冬季五輪閉幕から間もなく、米国とイスラエルによるイランへの爆撃が始まった。報復するイランはホルムズ海峡を事実上封鎖。原油の9割以上を中東から輸入している日本は深刻なエネルギー危機に陥る可能性がある。超大国のリーダーであるドナルド・トランプ米大統領の専横な振る舞いに、日本を含め、世界が振り回されている。

五輪は過去に、2度の世界大戦の影響で夏冬計5度の中止を余儀なくされた。

2年後の夏にはロサンゼルス五輪を控えている。

次のホスト国が戦火を広げる当事国であるという現実。IOC会長就任後、初の夏季五輪を迎えるカースティ・コベントリー会長は難しいかじ取りを迫られている。

ミラノ・コルティナ 2026 冬季五輪寄稿②

パラリンピック視察報告

宮崎明世(筑波大学体育系)

2026年3月6日から15日まで、イタリアでミラノ・コルティナ・パラリンピックが開催された。5日から11日の日程で現地に滞在し、ヴェローナで行われた開会式や文化展示などのフィールドワークを行った。今大会は複数都市での分散開催で、ミラノ(氷上競技)とコルティナダンペッツォ(雪上競技)のオリ・パラ共通軸以外に、パラリンピックはテーゼロ(パラクロスカントリースキー、パラバイアスロン)でも競技が行われた。ミラノとコルティナの間は移動距離が約400km、公共交通機関で5、6時間はかかる。このような事情から、視察は開会式が行われたヴェローナとミラノに限定した。

1. 開会式

パラリンピックの開会式は、オリンピックの閉会式と同じアリーナ・ディ・ヴェローナで行われた。約2000年前に建てられたこの円形闘技場(写真1)は、ローマのコロッセオに次ぐ3万人収容可能で、その音響の良さからオペラなどのコンサートにも使用される施設であった。

3月6日20時から始まった開会式は、照明やレーザー光線などを駆使した舞台演出に、車いすや義足の人を含む多くのダンサーがさまざまなプログラムを展開した。一つの国・地域につき入場選手は最多4人で、国旗を持ったボランティアだけというところもあった。競技会場が離れているため、他会場にいる選手は映像で紹介されていた。聖火の入場と聖火台への点火は開会式のハイライトだが、前回24年パリ・パラリンピックの開会式でも聖火ランナーを務め、個人・団体に銅メダル2個を獲得した愛称「ベベ」こと、地元イタリアの車いすフェンシングのベアトリーチェ・ヴィオ選手(16年リオと東京2020の女子フルーレ個

人金メダリスト)が運んできた聖火は、「光」として多くのダンサーの手に移され、それが別会場のミラノとコルティナにある聖火台に灯される、という演出であった。複数会場それぞれに聖火台があるためであろうが、目の前で聖火台への点火を期待する観客としては少々残念な感があった。開会式は 2 時間程度で、オリンピックよりも小規模であったため、入場を待つ選手のそばを通ることができたり、彼らが近くの席に座ったりして、出場選手が身近に感じられた。



写真 1：開会式のあった円形競技場(寄稿者撮影、以下計5枚とも)

2. 文化展示

ミラノ・コルティナ大会の文化オリンピックとして展開されたプログラムのうち、パラリンピック期間中まで行われた以下のような文化展示を視察した。

1) Life in Sports: The Face and Achievements of “100 Female Experts”

スポーツの「100 人の女性専門家」のうち、イタリア人女性 21 の写真と功績に関するパネル展示であった。メダルを複数個獲得したオリンピック・パラリンピアンのほか、コーチや技術の専門家が紹介されており、女性初の現 IOC 会長、カースティ・コベントリー氏も取り上げられていた。ヴェローナ中心街からやや離れた伝統的な石造りの街並みにパネルが設置されており、見に来る人はまばらであった。



写真 2: Life in Sports パネル展示(ヴェローナ)

2)The Olympic Games A 3000-year History:オリンピック競技大会 3000 年の歴史¹

ミラノ中心地にあるルイーヂ・ロヴァティ財団の展示場で、大会に合わせて開催された特別展である。オリンピック 3000 年の歴史の中で、古代の遺物と現代の大会に関するものを合わせて展示することで、オリンピックの理想がその基本理念に沿って、数十世紀を経てどのように進化してきたかを示すことが目的で、展示物は古代オリンピックの競技の様子が描かれた壺や紀元前 6 世紀ころの遺跡である「オリンピックの墓」の壁画、ピエール・ド・クーベルタンのボクシング・グローブやウサイン・ボルトのユニフォームまで多岐にわたった。



写真 3:オリンピック 3000 年の歴史

3)White Out The Future of Winter Sports²

世界のデザイン発信地、ミラノきってのトリエンナーレ・ミラノで開催された文化展示である。「ホワイトアウト:雪が消えたらウィンタースポーツはどうなるのか」をテーマに冬季競技の用具やウェアなどの開発、デザイン、技術に関わる工夫や、地球温暖化対策なども紹介されていた。



写真 4:”White Out” (トリエンナーレ・ミラノ)

3. ミラノの聖火台と「平和の門」Arco Della Pace

ミラノの聖火台は、センピオーネ公園の入り口に立つ「平和の門」に設置されていた。19 世紀初頭、ナポレオンの時代に着工され、同世紀半ばに完成したこの歴史的建造物の中央に聖火台が設置され、その中で聖火が燃えていた。周辺は広場で見物客が訪れていたが、それほど多くはなく、夜間にはライトアップも行われていた。街の歴史的な価値や文化を伝える建造物を活用した聖火台は威厳に満ち、ヴェローナのパラリンピック開会式会場とともに、開催都市らしさが感じられた。



写真 5:ミラノ「平和の門」の聖火台

4. パラアイスホッケー

パラリンピックでミラノを会場として行われた競技はパラアイスホッケーのみで、会場は中心部から離れた新設のホッケーアリーナであった。鉄道や地下鉄の駅から無料のシャトルバスで比較的スムーズに移動できた。一方で掲示案内がわかりにくいところにあたり、会場周近にもかかわらずボランティアの誘導がなかったりする場面もあった。地元イタリア戦を観戦したが、複数の小学生の団体がイタリア国旗を持って声援を送り、パラリンピックならではの雰囲気を感じることができた。

オリンピック期間中は、ミラノでも複数の競技が開催され、もう少し盛り上がっていたのではと思われるが、視察に訪れたパラリンピック期間は、さほど感じられなかった。そもそもミラノは世界でも人気の高い観光地で、代表的な建造物である大聖堂前の広場は常に観光客であふれていた。しかし、それはパラリンピックとは関わりがないように感じられ、各所に設けられたオフィシャル・スーベニアショップにも行列はなかった。冬季大会は夏季大会と比較して規模が小さく、参加人数も少ない。また、オリンピック後に同じ会場で開催されるパラリンピックについてはマスコミの扱いもさらに小さく、社会的に注目が集まらないように思われた。それでも、競技会場では、小学生の応援など日本でも見慣れた光景に出会うことができ、このような取り組みや文化展示などによって、オリンピックやパラリンピックの価値に対する人々の理解を深めることができるのではないだろうか。

-
- 1 オリンピック競技大会 3000 年の歴史 I Giochi Olimpici Una storia lunga tremila anni
<https://www.olympics.com/museum/events/fondazione-luigi-rovati>
 - 2 ホワイトアウト:雪が消えたら ウィンタースポーツの未来
Triennale Milan:White Out The Future of Winter Sports
<https://triennale.org/eventi/white-out-winter-sports>

連載「クーベルタン学校」の素顔にふれる

(2) ピエシュチャニ・クーベルタン学校(スロバキア)

田原淳子(CJPC 委員長)

本通信第3号に本連載(1)として、スロバキアのピエール・ド・クーベルタン・ギムナジウム・ピエシュチャニ校(Gymnázium Pierra de Coubertina Piešťany、以下、ピエシュチャニ校)の関係者来日について記したが、今回はその創設と活動について同校教諭エバ・コルティチェリ氏の提供資料に基づいて紹介する。

なお、この連載では、次号から掲載予定の「国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム参加者によるリレーコラム」と並行して、国際 YF 開催校以外にも世界中にあるクーベルタン学校について適宜紹介していきたい。学校におけるオリンピック教育の先進的な事例として参考になれば幸いである。

ピエール・ド・クーベルタン学校になる

ピエシュチャニ校の歴史は1929年に遡り、1936年に開学した。約90年の歩みの中で何度か校名を変更し、現在の名称は2003年、イバン・ルクナー校長の時代に命名された。同校長はかねてより、ピエール・ド・クーベルタンの思想に倣って生徒を教育することを考えていた。近代五種競技を通じて旧知のエレナ・マリコバ氏から、国際ピエール・ド・クーベルタン委員会(CIPC)がスロバキアの高校もクーベルタン学校のネットワークに参加してはどうかと言っていると聞き、即座にこの好機をつかんだ。スロバキアでは2000年代初頭まで、教育機関の名称にクーベルタンのような外国人の名前を冠するためにはいくつかの法的な問題があり極めて困難であった。しかし、すべての課題が解決すると、教師による最終投票が行われ、現在の学校名になった。そして、多くの素晴らしい経験とパートナー校との協力関係への扉が開かれたのである。

ピエシュチャニ校は2005年から国際 YF に参加し、国を越えたパートナーとの絆を築いてきた。2015年には、記念すべき第10回国際 YF を開催し、2024年にはクーベルタン学校20周年をネットワーク内のチェコ、オーストリア、ドイツ、エストニアの親しいパートナー校と共に祝福した。

ネットワーク関連活動

同校は、クーベルタン学校のネットワークやパートナー校の国や文化に対する生徒の関心を高める教育にも熱心で、相互の絆をさらに強化するために、以下のような様々な活動を展開してきた。

- ・文化旅行プロジェクト:旅行をテーマに学習する際に、生徒はクーベルタン学校のネットワーク内の目的地を選択し、その地の文化、歴史、観光名所などの興味深い情報を含むプレゼンテーションを作成した。
- ・ペンパル・レター:授業で個人の紹介文やインフォーマルな手紙の書き方を学ぶ際に、ネットワーク内のパートナー校の生徒に宛てて手紙を書いて送った。
- ・ミニエキスポ:川上泰弘・駐スロバキア日本国大使らが来賓として出席した2年前の創立20周年記念行事では、関連行事として生徒たちが国際 YF 開催国を紹介するミニエキスポを企画・運営・進行的した。
- ・バイリンガル演劇:同じく20周年記念行事の一環として、同校のバイリンガルクラスの生徒たちが、ピエール・ド・クーベルタンと彼のオリンピズムについて創意工夫に満ちた手法で紹介するオリジナル劇を英語で書き上げ上演した。
- ・フェアプレー寸劇:生徒たちは多数の有名なオリンピック選手を紹介しながら、オリンピック競技におけるフェアプレーの大切さを訴えるオリジナル劇をスロバキア語で作って上演した。

・屋外写真展「さくらチャレンジ」:同校前の広場は桜並木で、教師は生徒たちに満開の桜を背景にスポーツやオリンピックの価値をテーマにした写真を撮影するよう呼びかけ、毎年6月上旬に開催されている地元の写真クラブ主催の屋外写真展「パークフォト」に参加している。

・パートナー校との相互交流:同校は、欧州連合(EU)の助成金(ERASMUS+)を得て、過去2年間に生徒たちとパートナー校を複数回、訪問した。2024年9月、コルティチェリ教諭は27人の生徒を引率してエストニアを1週間訪問し、同地のクーベルタン学校であるユレナルメ・ギムナジウムが隔年開催するオリンピック祝賀行事に参加した。翌25年1月には同じクラスを2つに分け、一方はドイツ・エアフルトのクーベルタン学校を、もう一方は同じドイツ・ヴェルツブルクでCIPC会員が勤める学校をそれぞれ4日間訪れた。このような経験をもとにピエシュチャニ校は2025年度、コルティチェリ教諭の同僚の教師が別のクラスの生徒を引率してヴェルツブルクを再訪し、また同地の学校からもピエシュチャニ校への訪問があった。それ以外にも2クラスの生徒をオーストリア・ラートシュタットにあるクーベルタン学校のスキー・コースに参加させた。本2026年中には、オーストリアとチェコ共和国のパートナー校を訪問予定である。

日本にちなんだ活動も

同校は現地の日本大使館の協力のもと、日本に関する文化や学習も重ねている。

・文化講演と「日本発見チャレンジ」:2022年には、日本の歴史と文化、日本語の書き方に関する中川真・駐スロバキア日本国特命全権大使(当時)の講演会や、日本をテーマに写真を撮影した生徒の作品展を実施した。この写真展には、中川大使自らスロバキアの田園風景を撮影した作品も出展された。また、地元の名高い茶室で茶道の講義を受け、植物園にある日本風のあずまやを訪れた。たまたまその日、日本の文字がデザインされた服を着ていた同級生がいて、それを写真に収める生徒もいた。

・広島記念展

2025年5月には川上泰弘大使を講師に日本文化に関する講演会を行い、広島・長崎への原爆投下80年を前に広島平和記念資料館寄贈のポスター展も開催した。サダコさんの物語に触発された生徒らが自発的に折り鶴を折り、1,300羽以上が広島平和記念資料館へ送付された。

記念展には、全校生徒が歴史の授業の一環として足を運び、近隣の専門学校からも3クラスの生徒が参加した。記念展でガイドを務めた生徒たちには、閉会式で川上大使から直接、認定証が授与された。それは、同校美術教師のアルジェバ・ミケロヴァ教諭がデザインし、ラディム・ウルバン校長、川上大使、そして石田芳文・原爆資料館長の直筆署名入りの特製認定証であった。

生徒たちは折り紙、書道、雑学クイズ、お箸チャレンジなどの関連アクティビティにも参加し、空手を習う生徒数名による演武が解説付きで披露され、囲碁の紹介も行われた。

・日本大使館主催行事への参加

同校の生徒たちは、スロバキアの首都ブラチスラバで開催された日本大使館主催イベント「アジアと日本の日」に参加し、様々な文化紹介、パフォーマンス、料理、クイズ、お土産コーナーなどを楽しんだ。また、スロバキア国立博物館で開催された日本の伝統工芸「現代・木彫・根付」展をクラスで見学した。日本の建国記念の日の祝賀行事に同校の関係者が招待を受けたり、著名な日本人アーティストによる舞踊や演劇の公演、ピアノや打楽器のコンサートなど様々な文化イベントに同校の教師が参加したりした。

日本大使館は「Read Japan Project(日本を読もうプロジェクト)」として、日本をテーマにした歴史、文化、小説など、英語で書かれた図書50冊を同校に寄贈した。

以上のように、スロバキアのピエシュチャニ・クーベルタン学校は、クーベルタン学校のネットワークに参加して以来、オリンピック教育の実践とそのネットワークを活用した学校間の国際交流を盛んに展開してきた。日本大使館との関係も密接で、日本に関する知識や文化、武道を同校の教育活動に積極的に採り入れている姿勢が印象的である。

このような教育実践の中から、2023 年夏、同校女子生徒が国際 YF で繋がりを得た国士舘高等学校を訪問し、以来、学校間のオンライン交流や写真の交換なども続けられている。世界各地で戦火が収まらない情勢下にあっても、若い世代の国際交流と相互理解の輪がさらに培われていくことが期待される。

文献

・ピエール・ド・クーベルタン・ギムナジウム・ピエシュチャニ校の Web サイト

<https://gypy.edupage.org/a/english-version>

・エバ・コルティチェリ先生からの提供資料(未公開)

会費の納入について

会費が未納の方は、会費3,000円の納入をお願いします。また、ホームページの作成を行うため、寄付金105,000円を募っています。ご協力のほどお願いいたします。なお、領収書が必要な場合は宛名と郵送先を事務局までお知らせください。連絡先:事務局 和所泰史 [メール: y-washo@ssu.ac.jp](mailto:y-washo@ssu.ac.jp)

銀行名: 三菱 UFJ 銀行

支 店: 豊田支店 (店番 404)

預金種目: 普通

口座番号: 0831133

口座名: 日本ピエール・ド・クーベルタン委員会 委員長 田原淳子

入会のご案内

日本ピエール・ド・クーベルタン委員会への入会を希望される方には、こちらの入会フォームまたは事務局のメールアドレス(事務局 和所泰史 [メール: y-washo@ssu.ac.jp](mailto:y-washo@ssu.ac.jp))をご案内(紹介)ください。



<https://forms.gle/MAM4PdLAPmRLjQpe6>

お知らせ

次(第6)号では、「CIPC 創設 50 周年記念行事に参加して」リレーコラム「国際ピエール・ド・クーベルタンニュースフォーラムに参加して」「ユースオリンピックについて」国内外の動向、研究会報告、書評、五輪短信などなどを予定しております。

本通信へのご意見はもとより、今後の寄稿や研究会の企画について、このような方にこのような内容で原稿や発表を、といったご希望もぜひお寄せください。

連絡先: 事務局・和所泰史 [メール: y-washo@ssu.ac.jp](mailto:y-washo@ssu.ac.jp)